# おてら

## 一休さん

住職　蒲原　霊英

門松や　冥土の旅の一里塚　めでたくもあり　めでたくもなし

これは、とんちで有名な一休さんの歌です。「正月は一つ歳を取り、死に向かって進む旅の一里塚（一里毎に築かれた塚で里程標）ではないか。こうしてどんどん進んで己も死んでいくんだと確認させられるのが正月なんだぞ。正月の何がめでたいんだ！」という意味です。一休禅師は正月で賑わう京の都の辻々を、人間の髑髏を刺した竹竿を持ち、「このとおり、このとおり、ご用心、ご用心」とふれ廻りながら、この歌を朗々と詠んで歩いたといいます。

あまりに皮肉たっぷり過ぎますが、言っていることは正論です。しかも、一つ歳を取る節目の時だからこそ、本当は考えたくもない自らの人生の旅の終点＝死について考えてみることに意味があります。ある日突然旅の終わりを迎えるかもしれないのであれば、一時一時、一日一日を大切に生きようと思うでしょう。私たちは旅行に行くと、限られた時間を有効に使って、美しい景色を見たりおいしい物を食べたりしようとします。それと同じですね。

また考えてみると、歳を取るのは当たり前のようですが、こうやってまた一つ歳を取るには、私一人の力だけでは到底無理なことです。ここまで量り知れないほど多くのいのちのおかげさまで、今こうやって生かさせてもらっているのだということに気づき、改めて感謝しなければなりません。また逆も然りで、自覚はないかもしれませんが、私のいのちもまた、多くのいのちを支え育んでいます。このように、一人ひとりのいのちは尊いご縁の中で生かされていて、私たちは自分勝手な都合で、他のいのちも自分のいのちも奪うことはできません。これがお念仏の教えです。

私たちも新しい年を迎えたこの機に、改めていのちのはかなさと尊さについて深く考えてみませんか。

ちなみに、一休禅師は21才も年下の蓮如上人（本願寺８世）と宗派を超えて親交が深く、寛正２年（1461）に本願寺で営まれた親鸞聖人の二百回遠忌法要にもお参りされました。そして、襟巻のあたたかそうな黒坊主こやつが法は天下一なりという歌を詠んで、お念仏の教えを讃えられました。

合掌

＊「襟巻のあたたかそうな黒坊主」＝親鸞聖人

# 「私たちのちかい」についてのご親教

門主　大谷　光淳

私は伝灯奉告法要の初日に「念仏者の生き方」と題して、大智大悲からなる阿弥陀如来のお心をいただいた私たちが、この現実社会でどのように生きていくのかということについて、詳しく述べさせていただきました。このたび「念仏者の生き方」を皆様により親しみ、理解していただきたいという思いから、その肝要を「私たちのちかい」として次の四ヵ条にまとめました。

## 私たちのちかい

一、自分の殻に閉じこもることなく
　穏やかな顔と優しい言葉を大切にします
　微笑み語りかける仏さまのように

一、むさぼり、いかり、おろかさに流されず
　しなやかな心と振る舞いを心がけます
　心安らかな仏さまのように

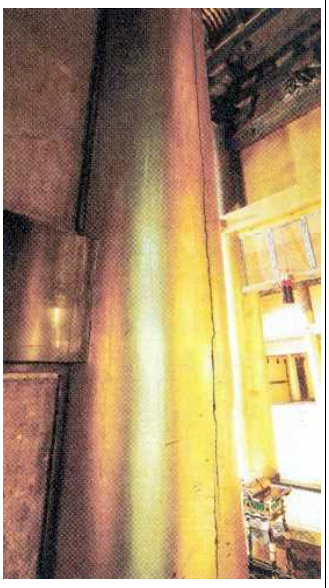
一、自分だけを大事にすることなく
　人と喜びや悲しみを分かち合います
　慈悲に満ちみちた仏さまのように

一、生かされていることに気づき
　日々に精一杯つとめます
　人びとの救いに尽くす仏さまのように

この「私たちのちかい」は、特に若い人の宗教離れが盛んに言われております今日、中学生や高校生、大学生をはじめとして、これまで仏教や浄土真宗のみ教えにあまり親しみのなかった方々にも、さまざまな機会で唱和していただきたいと思っております。そして、先人の方々が大切に受け継いでこられた浄土真宗のみ教えを、これからも広く伝えていくことが後に続く私たちの使命であることを心に刻み、お念仏申す道を歩んでまいりましょう。

合掌

# ご本尊を御影堂にご遷仏
# 御遷仏・御動座法要



修復に入るため閉鎖される阿弥陀堂の内陣。柱や壁には亀裂が入っている。

一昨年８月から進められている本山・阿弥陀堂内陣の修復工事の本格化に伴い、ご遷仏とご動座が先月17日に行われた。10時から阿弥陀堂と御影堂でおつとめし、御真影を御輿にうつし、内陣北脇壇の仮厨子へご動座。午後２時からご本尊を唐櫃にうつし、奏楽員や本山内局の縁儀の列とともに阿弥陀堂から御影堂へご遷仏した。内陣中央のお厨子にご安置の後、午後４時半からご門主御導師のもと「御遷仏・御動座法要」が営まれた。

現在の阿弥陀堂は宝暦10年（1760）に再建、平成26年（2014）に国宝に指定された。内陣の修復は、飛雲閣と唐門（いずれも国宝）の修復工事とともに国庫補助事業として一昨年８月から始まり、これまでに天井画１９０枚の修理が進められてきた。ご遷仏の後は間仕切り壁を設けて工事区域を閉鎖し、亀裂の入った柱や襖の修理や、退色した彫刻の補彩などを行う。